

# 小学校における古典文学教材の読みの現代的価値

—教材「浦島太郎」に注目して—

瀧口 美絵

広島都市学園大学 准教授

## 要 旨

2008（平成20）年に小学校学習指導要領において「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」が登場し、小学校における古典文学教材の採録、学習活動においてその捉え方に変化が生じている。本稿ではその変化に注目し、そのことが、教材の読みにどのように影響していくのかを検討する。

キーワード：小学校学習指導要領、浦島太郎、国定教科書、御伽草子、伝統的な言語文化、教材、読み

## 1. 研究の目的

2008（平成20）年以前の『小学校学習指導要領解説（国語編）』（以下、〇年学習指導要領とする）では、古典文学教材について、主に入門期の読み物として、「昔話や童話などの読み聞かせを聞くこと」という位置づけがなされていた。それが、2008（平成20）年に「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」（以下「伝統的な言語文化」とする）が位置づけられて以降、小学校における古典文学教材は、「我が国の歴史の中で創造され、継承されてきた文化的に高い価値をもつ言語そのもの」とされ、「歴史の中で継承されてきた伝統的な言語文化に親しみ、継承・発展させる態度を育てること」がその内容として捉えられるようになった。さらに、2016（平成28）年以降、中央教育審議会答申に示されているように、「引き続き、我が国の言語文化に親しみ、愛情を持って享受し、その担い手として言語文化を継承・発展させる態度を小・中・高等学校を通じて育成するため、伝統文化に関する学習を重視することが必要である。」とされ、2017（平成29）年告示の学習指導要領より、「知識及び技能」の一部として新たに「我が国の言語文化に関する事項」が整理され、これまで以上に言語芸術や言語文化としての古典文学教材の価値が重要視されるようになっている。

このような制度上の変化は、古典文学教材の採録や読みに変化をもたらすはずである。

そこで本稿では、2020（令和2）年学習指導要領完全実施に向けて、どのように古典文学教材の読みを捉えていくのかを検討する。具体的には、古典文学教材のなかでも昭和戦前期より教科書採録数の多い教材「うらしまたろう/浦島太郎」（以下、「浦島太郎」とする）をとりあげる。

まず、「伝統的な言語文化」の位置づけ以前の教材「浦島太郎」の内容と特徴を捉え、転換点以降の教材「浦島太郎」と比較する。そのうえで、「伝統的な言語文化」の位置づけが、読みと解釈にどのような変化をもたらすのか検討し、今後の古典文学教材の読みへの影響を大学生対象におこなった調査データを分析・考察しながら論じることとする。

## 2. 教材「浦島太郎」採録の変遷とその特徴

### 2の1 教材「浦島太郎」採録の変遷

教材「浦島太郎」は、1910（明治43）年の『尋常小学読本（巻3）』から戦後にかけて、小学校の読本・教科書教材として採録され続けていた作品である<sup>1</sup>。中嶋真弓（2010）は、教材「浦島太郎」の採録の変遷とその分析を丁寧におこない、「浦島太郎」が担う時代の役割が「今後の昔話教材のあり方を考えていく上での一助となる」と、この教材の位置付けの重要性を示している<sup>2</sup>。

採録状況を確認することができた教材を比較すると、「ウラシマノハナシ」<sup>3</sup>「うらしま太郎」<sup>4,5</sup>「浦島太郎」<sup>6</sup>「うらしまたろう」<sup>7,8</sup>等、表記や挿し絵に関する差異はみられるものの、この物語には文部省唱歌に至るまで、ストーリー展開に一貫性がみられる<sup>9</sup>。

そもそも「浦島太郎」の元始は、8世紀初期『日本書記』『丹後国風土記』『万葉集』までにさかのぼり、その物語構成の種類も「異境譚」「神仙譚」「放生譚」「報恩譚」「呪宝譚」「異類婚姻譚」と、数多くの語りが存在している。それにも関わらず、教科書教材に採録されている「浦島太郎」のストーリー展開に変化がみられない理由について、三浦佑之（1989）は次のように述べている。

これは断定してよいことだと思うが、誰もが知っている昔話「浦島太郎」は、国定教科書をそのまま語ったものなのである。（中略）戦前の国定教科書というものは、ただ文字によるテキストとしての機能を果たしていたのではない。ことに国語や修身（道徳）の教科書は、戦前の小学校教育のすべての根拠だったのであり、そこに書かれている内容は絶対的な権威として存在していた。しかも、浦島太郎は明治四十三年から昭和二十四年までの長期間、一度も外されることなく小学二年生の教材に鎮座し続けたのである。この事実が、昔話「浦島太郎」を強ちに呪縛しただろうことは想像に難くない。というより、そもそも「浦島太郎」という昔話は、国定教科書に登場する以前、炉端の語りのひとつとして存在したか否かということ自体あやしいのである。少なくとも、現在に伝えられている私たちの昔話「浦島太郎」は、国定教科書そのものでしかないのである<sup>10</sup>。

三浦は、共通認識されている「浦島太郎」について、「誰もが知っている昔話「浦島太郎」は、国定教科書をそのまま語ったもの」として、1910（明治43）年から現在に至るまで、ほぼ同一であることを示している<sup>11</sup>。その理由について、三浦は「国定教科書」の「呪縛」

である、と述べている。

さらにその国定教科書の編修について、教科書に採録される以前に見られる童話としての「浦島太郎」と採録後の教材との差異について詳細に比較分析している松原一義（2002）は、次のように示している。

浦島の話は、明治になると、巖谷小波によって『日本のお伽噺集』に口述筆記されることになる。

小波に至り、浦島の話はさらに変形している。この後、小波は国定教科書の編修の嘱託となり、その教材採択にも影響を及ぼしている<sup>12</sup>。

ここから、巖谷小波の編纂により採録された教材「浦島太郎」が、現在にいたるまでの私たちの「浦島太郎」像を形成していることがわかる。

## 2の2 教材「浦島太郎」の構成

「浦島太郎」は、大きく8つの場面から成り立っている。

- |   |
|---|
| 1 場面：昔、浦島太郎という人がいた。<br>2 場面：浜辺で亀をいじめている子どもたちがいたので、亀を助けて海へ放してやった。<br>3 場面：数日後に、大きな亀が出てきて、お礼に浦島を背中に乗せ、竜宮城に行った。<br>4 場面：竜宮には乙姫という女の人がいて、浦島をもてなし、浦島は帰るのも忘れて楽しい日々を過ごした。<br>5 場面：何日かして浦島は故郷に帰りたくなり、乙姫に暇乞いをする、乙姫は「決して蓋を開けてはいけない」といって、玉手箱というきれいな箱を浦島に与えた。<br>6 場面：浦島は玉手箱をもらい、亀の背中に乗って故郷の浜に帰った。<br>7 場面：故郷の両親は死んでしまい、村の様子もすっかり変わり果てていた。<br>8 場面：寂しくなった浦島が玉手箱の蓋を開けると、白い煙が出てきて、浦島はたちまち白髪の老人になってしまった。 |
|---|

## 2の3 「国定教科書版」教材「浦島太郎」の評価

前述したように、教材「浦島太郎」は巖谷小波によって国定教科書に編纂されたいわば「国定教科書版浦島太郎（以下、「国定教科書版」とする）」ともいえる物語である。

松原は、「国定教科書版」について次のように評価している。

（前略）国定教科書のそれは、浦島の話の断片を享受した巖谷小波の語りをもとにしたために、不自然な変形をしている。教材を扱う場合の内容学の重要さは言うまでもないが、その教材が変形したまま享受される場合の不自然さはやはり整備されなければならぬまい<sup>13</sup>。

松原は、「国定教科書版」教材「浦島太郎」の「話」について、「不自然な変形をしている」と評価し、その「不自然」さを「整備」する必要性を指摘している。松原は、「めでたしめでたし」と締めくくられている点の「不自然」さについて、「御伽草子」の浦島太

郎（以下「御伽草子版」とする）の「めでたしめでたし」をそのまま残したため、「変形」した点などを例に挙げている。

また、三浦は、そのような不自然さをもっている「国定教科書版」が定着し、継承されてきてしまったことへの評価を次のように述べている。

（前略）「浦島太郎」は（中略）矛盾を抱え込んだまま受け継がれていったのである。この四十年の間に、善いことをしたのにどうしてたちまちお爺さんにならずにちゃいけぬのか、と思い悩んだ子どもたちが全国にどのくらいいたであろうか。また、この矛盾について、先生たちはどのように説明して子どもたちを納得させたのだろうか。変な質問をして先生に叱られた子どもたちもたくさんいたはずである<sup>14</sup>。

三浦は、「国定教科書版」において「善いことをしたのにどうしてたちまちお爺さんにならずにちゃいけぬのか」という「矛盾を抱え込んだまま受け継がれていつてしまったことを指摘している。ただし三浦は、その理由として乙姫はなぜ浦島に玉手箱を与えたのか、玉手箱の中身は何か、なぜ小波がこのようなストーリーに構成したのか「わからない」としながら、「お伽草子『浦島太郎』を基本に据えて、近世の種々の作品や昔話の報恩モチーフなどを念頭に置いて、『浦島太郎』を児童向けの作品に仕立てあげたということになる<sup>15</sup>」と位置づけている。

このように「国定教科書版」教材「浦島太郎」は、巖谷小波の編纂によって児童向けにアレンジすることを重要視され、そのストーリー展開に「不自然」さや「矛盾」を抱えながら、さらにその内容のまま一般化してしまっている作品であるといえる。

## 2の4 「伝統的な言語文化」以前の古典文学教材の位置づけ

そもそも、なぜ、浦島太郎は国定教科書に採録されたのだろうか。1910（明治43）年刊行、『尋常小学読本』の趣意書をみると、「多くの国民的童話・伝説を加えたこともまた新読本の一特色とするところなり。」「趣味ある説話を加入したり。」とある。この趣意書からは、文学的趣味の童話を重視し、童話や伝説を鑑賞させることが、ひとつの目的であったということが分かる。つまり、古典としての歴史的な記述の正確さを享受することが求められていたわけではなく、昔話としての「趣味ある説話」を味わうことを趣旨とした採録であったことがわかる。

このように、「伝統的な言語文化」の位置づけ以前の昔話は、様々な物語同様、童話や伝説を鑑賞させる教材の一つとして教科書に位置づいていた。

## 3. 「伝統的な言語文化」における古典文学教材の位置づけ

しかしながら、童話や伝説の鑑賞と捉えるのであれば、物語の読みにおいて、そのような「矛盾」や「不自然」さを包括した状態で受容することには特に問題はない。では、な

ぜ「矛盾」や「不自然」さが問題になるのだろうか。

ここで重要になってくるのが、「伝統的な言語文化」の位置づけである。そこでここでは、「伝統的な言語文化」という項の学習指導要領の位置づけと、それによる教科書教材への影響、「伝統的な言語文化」以前との相違点をまとめてみる。

### 3の1 平成20年学習指導要領の位置づけ

平成20年学習指導要領では、「伝統的な言語文化」とは、「歴史の中で創造され」てきた「文化的な言語」のことであり、その「言語文化」に「親しむ態度」が求められているとされている。つまり、「昔の人のものの見方や感じ方」そのものに直接触れ、体感することが求められているのである。たとえば、歌舞伎や能などの古典芸能について、説明されている文章を読むだけでなく、NHKの学校放送やビデオクリップ教材等を活用し直に鑑賞したり、実際に表現してみたりする活動が想定されている。

このような古典学習の転換について渡辺春美（2012）は次のように述べている。

学習指導要領によれば、伝統的な言語文化は「文化としての言語」、「文化的な言語生活」、「多様な言語芸術や芸能」とされ、従来の古典よりも幅広くとらえられている。古典のとらえ方の変化とともに、従来、小学校五年生からであった古典の学習指導の対象が小学校全学年に及ぶことになった。大きな転換である。この「伝統的な言語文化」の学習指導をどのように充実させるかは、今日の国語科教育の切実な課題の一つであろう<sup>16</sup>。

渡辺は、「伝統的な言語文化」が、「従来の古典よりも幅広く」「大きな転換である」と述べている。

このような「伝統的な言語文化」の位置づけにより、これからの古典文学の読みが、従来のようなやさしいことばに置き換えた児童向けの昔話の読みではなく、古語や原文も対象とした「言語芸術」の享受となったということがわかる。

### 3の2 「伝統的な言語文化」の登場以降に採択された教材「浦島太郎」

では、教材「浦島太郎」は、現代の小学校課程の教材としてどのような形で採録されたのであろうか。ここでは、「伝統的な言語文化」の位置づけ以降の教材「浦島太郎」の採録状況とその内容を検討する。

#### 3の2の1 「伝統的な言語文化」の位置づけ以降の教材「浦島太郎」の採録状況

2011年（2008（平成20）年学習指導要領準拠）の小学校4年生の教科書（三省堂）に採録された教材「浦島太郎<sup>17</sup>」をみると、その本文は、「国定教科書版」ではなく、「御伽草子版」の原文の冒頭がそのまま採録されている。指導書の「教材設定の趣旨」には、次の

ように明記してある。

伝統的な言語文化に親しむため、児童になじみのある昔話の冒頭を取り上げた。昔話については低学年期ですでに学習しているが、原文で読むことによって、伝統的な言語文化について改めて興味関心を持つことを期待している。

現代語訳と照らし合わせながら読むことで、古語と現代語との対応も容易になり、古語への理解を深めることもできる（中略）古語を通して、現代語の語彙を増やしたり、改めてことばへの興味関心を喚起させることも期待できるのである<sup>18</sup>。

これをみると、小学4年生の教科書に『日本古典文学全集<sup>19</sup>』の原文をそのまま採録している趣旨について「原文で読むこと」、「古語への理解を深めること」が重要視されて教材設定がなされているということがわかる。平成20年学習指導要領で示されていたように、原文を音読することにより、古典文学教材の読解の導入としてまず古語を体感させることを目的とした構成になっているということである。

### 3の2の2 御伽草子版「浦島太郎」の構成

しかしながら、ここで問題になってくることは、御伽草子版と国定教科書版は、作品構成や内容が大きく異なっている点である。ここでは、御伽草子版「浦島太郎」の構成を整理してみる。

御伽草子版「浦島太郎」は、大きく9場面から成っている。

- 1 場面：昔、浦島太郎という人がいた。
- 2 場面：船で海に釣りに出ていたらきれいな亀がぶつかったが、太郎は亀を放してやった。
- 3 場面：明るく日の夕方、太郎は海を流されてきた乙姫船に乗り移り、竜宮に送った。
- 4 場面：竜宮には竜王がいて、亀は乙姫の化身で助けられた感謝を伝えられ、浦島をご馳走や踊りでもてなし、あまりの楽しさに太郎は乙姫と結婚した。
- 5 場面：ある日、乙姫は太郎を四季の部屋に案内したが、その景色を見て急に故郷が恋しくなり、太郎は乙姫に暇乞いをする、「決して蓋を開けてはいけない」といって、玉手箱というきれいな箱を乙姫に渡された。
- 6 場面：浦島は玉手箱をもらい、船を漕いで故郷の浜に帰った。
- 7 場面：故郷の両親は死んでしまい、村の様子もすっかり変わり果てていた。
- 8 場面：悲しくてたまらなくなった浦島が玉手箱の包みを開けると、3段がまへの漆の箱の1段目から白い煙が出てきて、2段目に入っていた手鏡で顔を見ると太郎は白髪のおじいさんになっていた。
- 9 場面：3段目には白い2枚の鶴の羽があり、それが肩にはりつき、太郎は鶴になって飛んでいった。

### 3の2の3 国定教科書版と御伽草子版との比較

ストーリー展開を比較すると、大きく次のようにまとめることができる。

出来事	国定教科書版	御伽草子版
1. 太郎と亀との出会い	子どもがいじめていて助けた	海に釣りに行って助けた
2. 乙姫と太郎の関係	助けられたお礼をする・される	竜王に礼をされ、その後結婚した
3. 竜宮城での過ごし方	もてなされて接待を受けた	四季の部屋に通された
4. お話の結末	老人になる	鶴になって飛んでいく



国定教科書版では、亀は乙姫の家来であるが、御伽草子版では乙姫の化身であった。しかも国定教科書版では、竜宮で接待を受けるだけだが、御伽草子版では竜王が登場し、太郎と乙姫は婚姻関係にもなる。なかでももっとも重要な場面はストーリーの結末の相違である。

三浦は、御伽草子版「浦島太郎」の特質を次のように説明している。

重要なことは、太郎が結末で明神に昇華することが、発端において亀を放生した善行に対する〈報恩〉になっているということである。従って、同じく放生・報恩モチーフをもちながら、巖谷小波や昔話の「浦島太郎」で感じる、善い行いをしたのになぜという疑問はお伽草子の場合には生じないのである。〈老〉という負性を抱え込みながら、ここでは首尾一貫した放生・報恩譚のスタイルをそなえているからである。それが、中世小説『浦島太郎』の特質であり、浦島物語における中世的な独自性であったといえるのである<sup>20</sup>。

三浦が説明しているように、御伽草子版の「浦島太郎」は、国定教科書版のように善いことをしたのにおじいさんになってしまうという結末ではなく、鶴になって昇華するという結末になっている。

「浦島太郎」は古来より、遊仙窟にみられる遊女伝説や、日本書紀にみられる鶴亀伝説、さらに婚姻譚、異境譚、神仙譚など、多くの語りが存在する物語である。それが御伽草子に掲載されて以降「太郎が結末で明神に昇華する」「放生・報恩モチーフ」として定着し、大衆化したのである。そのため、この「昇華」は、この物語のキーポイントになる部分であり、国定教科書版では、この「昇華」部分が省略されてしまったことが不自然さや矛盾の結果になっていることを押さえておかなければならない。

### 3の3 「伝統的な言語文化」における古典文学教材の位置づけ

このようにとらえていくと、「伝統的な言語文化」の登場によって、古典文学教材のとらえ方に大きく影響があったことがわかる。古典作品の原文を古語のまま読むことにより、ストーリー展開がこれまでとは大きく違う物語を採用することになる。国定教科書版「浦島太郎」には、巖谷小波による児童向けを趣旨に生じた不自然さや矛盾が多く指摘されているが、1910（明治43）年以来多くの人が親しんでいるストーリーに対する愛着や安心感のようなものもある。

しかしながら、前述した松原（2002）が「その教材が変形したまま享受される場合の不自然さはやはり整備されなければなるまい」と指摘しているように、今後も古典文学作品を言語芸術としてとらえ、子どもたちに体感、継承させていくとするならば、この「伝統的な言語文化」という枠組みのなかで丁寧に整備し、読みの学習に向かう必要がある。

## 4. 学生による国定教科書版と御伽草子版の比較読みとそのとらえ方

このような大きな物語の相違を、読者はどのように読み、理解していくのか。稿者は、2011（平成23）年～2019（令和元）年にかけて広島県内の国立大学法人与私立大学において『初等国語』の講義（年約100名～250名）内で教材「浦島太郎」の比較分析をおこなっている。そのうち、ここでは、「伝統的な言語文化」登場後、教科書に御伽草子版が採録された年の2011（平成23）年～2012（平成24）年の学習者の読みとその理解を示していく。なお、現在に至るまでの読みの変化や傾向に関する調査データの分析・考察は別稿に譲る。

### 4の1 調査の方法

御伽草子版の教材「浦島太郎」は、教科書に採録されていた『日本古典文学全集36 御伽草子』所収の本文を用いた。また、国定教科書版は今後小学生にも同様の調査をすることを想定して、最もシンプルな構成になっている絵本<sup>21</sup>所収の本文を用いた。

これらの教材「浦島太郎」を学生にそれぞれ読み聞かせ、その比較・分析を記述させた。

### 4の2 学生による反応の分析

ここでは、学生の記述に多く見られた反応を傾向ごとに抜粋し、分析する。

#### 4の2の1 御伽草子版を知らず驚いた

調査開始当時の2011年の感想の傾向で最も多かった反応は、以下のような記述である。

- ・浦島太郎が鶴になる結末があるなんて知らなかった。また、お爺さんになる話でも竜宮城から戻ってくると村の様子が変わり、両親もなくなっていたという場面は覚えていなかった。
- ・自分の知ってる昔話が正しい！それしかない！とずっと思っていたので、自己経験のものを絶対視せずに、たくさん調べて、いろいろな場合があるということを忘れないでいきたいと思います。
- ・同じ浦島太郎でも、いろんな内容が受け継がれているのが分かった。特に、昔話は地域の特性なども入ってくると思うので、そういうのもしっかり事前に調べて教材として扱いたい。
- ・何より驚いたのが、浦島太郎の話には別バージョンがあったということである。私が知っていた浦島太郎のお話とは、少し違ったり、知らないシーンもあって驚きました。
- ・浦島太郎が鶴になるなんてはじめて知ったので驚きました。
- ・私は、太郎が「おじいさん」になるというお話しか知らなかった。自分が知っているものだけが浦島太郎と思って授業をしてしまったら、子どもたちの知識も視野もせばまりそうだった。
- ・私は「浦島太郎」といえば一つしかなく、そしてそれが万人に通ずると思い込んでいた。そのため、今日の授業で、違う話があることを実際に示され、その上で浦島太郎の縦の世界を見る中で、無意識下の決めつけは恐ろしいと感じた。

学生の反応のなかで最も多かったものは、「御伽草子版を初めて知った」という驚きであった。これは、本講義の目的が、①古典文学教材の教材研究についてはかならず史的展開を時代軸で確認しておかなくてはいけない、という分析方法の学習させることと、②そのうえで、「伝統的な言語文化」の登場による古典教育自体の捉え方の変化を理解させることにあったので、その講義の意図を踏まえて「自己経験のものを絶対視しない」という感想であったと考えられる。

しかしながら、やはりお話の結末で鶴になって飛んでいくというストーリーは衝撃的だったようで、これまで捉えていた浦島太郎と新たな読みの間で困惑した様子が率直にみられた。



## 4の2の2 国定教科書版「浦島太郎」の読み

- ・改めて聞いてみて、なんか残酷な感じで悲しくなった。
- ・浦島太郎の話は残酷だなあと思いました。乙姫様は説明不足だと思います。
- ・子どものころ、「開けるな、といっているんだから、それなら渡さなければいいじゃないか」と玉手箱を渡すくだりで思ったのを思い出した。
- ・乙姫はきっと地上が時間が経ってしまっていることを知っており、帰った浦島が絶望することも分かっていたのではないのでしょうか。知り合いもいない世界で生きていく辛さを思い、乙姫は浦島を本来あるべき年齢の姿に戻す玉手箱をあげた。しかし、乙姫は浦島を気に入っていたので、年をとって死んでほしくないという気持ちもあり、決して開けてはならないといった。このように考えると面白くないですか？
- ・私は、「善いことをしたのにどうしてたちまちお爺さんになるのか」という疑問を持っていました。その理由として、「年月が経って、誰も知り合いがいなくなった太郎の悲しくさびしい思いから、玉手箱を開けたときにお爺さんになった」というのを昔聞いたことがあります。（つまり、太郎のために時を進めてあげた）ホントかはよく分かりませんが。
- ・浦島太郎は「楽しさ」への戒めばかり記憶に残ると思いました。
- ・なぜ太郎は玉手箱をあけてお爺さんになってしまったのか？作者の意図は何なのか、「浦島太郎」について再び考えた。
- ・浦島太郎がとても気の毒でした。亀を助けたのになぜ…。もしや、乙姫の恨みor愛なのかなと思えました。竜宮城での3年は、太郎の世界では300年など長い時間の差があり、太郎が帰っても居場所はなく、本来お爺さんになっている（死んでいる）ため、玉手箱で老人になって死ぬ（または鶴になる）方が幸せかもしれない…（恨みだったらここで苦しむがいいさ!）と配慮したのかも、と考えました。

学生の読みからは、「玉手箱を渡さなければ…」、「玉手箱を開けなければ…」という「残酷で悲しい」印象が伝わってきた。しかしながら、それと同時に、これまで指摘されてきている国定教科書版の不自然さや矛盾に対して、その問題を解釈によって補いながら読み進めようと試みていた。ここからは、日本文化の一つとして定着しているこの物語を、古典文学教材として捉えるのではなく、昔話として、または、ひとつの独立した文学作品として味わおうとする姿勢をみることができた。

## 4の2の3 御伽草子版の「浦島太郎」の読み

- ・浦島太郎が鶴になるという話を聞いて、お爺さんになるよりもその方がすっきりすると思いました。
- ・自分も、昔から「なぜ良いことをしたらうらしまが報いを受けるのか」ということが疑問に思っていたので、知ることができてよかった。
- ・鶴になる方が物語としてしっくりくるし、納得できやすい。
- ・何で鶴になるんすかね、鶴と亀って、なんか、おめでたいですね。
- ・最後が年をとって終わってしまうと、その後は？という疑問が残ってしまうと思う。鶴で終わる、いろいろその後のイメージも膨らむうえ、どうして鶴になってしまうのかなど、いろいろ考えることができた。
- ・江戸や室町時代ぐらいから続いてきているというイメージが自分の中に勝手に作られていました。私も昔から太郎がかわいそうだと思い続けてきたので、やっと迷いがとけた気がします。
- ・私は、乙姫との約束を破ったからだとか、三日三晩も働かず楽な思いをして家族のことを忘れたからだと思っていたが、もっと奥が深いのかもしれないと思った。
- ・鶴になるバージョンを初めて聞きました。玉手箱を開けてしまう理由が絶望だったので、ふに落ちやすかったです。姫は浦島太郎が絶望してしまうことも見越して箱を渡したのではないのでしょうか。だとしたら、寿命の長い鶴に変身させたのはなんと皮肉というような気がしました。

学生の感想をみると、「鶴になる方が納得できやすい」「やっと迷いがとけた」「知ることができてよかった」「ほかの物語のルーツも調べてみたい」という前向きな読みがみられた。これらを経じて一言であらわすと、「しっくりくる」という納得感が御伽草子版にはあるということがわかる。

このように、御伽草子版には、矛盾や不自然さを感じながら読み進めなくて良いという安心感があるようである。それと同時に、学生の御伽草子版の読みからは、国定教科書版との比較した読みというより、幼い頃に定番の浦島太郎を読んで感じた疑問や矛盾を御伽草子版から埋め合わせていっているような様子として捉えることができた。

#### 4の2の4 指導者という立場としての「浦島太郎」の読み

ただし、本調査においてもっとも注目すべきは、「本講義を踏まえ、もしあなたが「浦島太郎」を教材化、または授業化するとした場合、どの作品を選択しますか。」という質問に対する回答である。

学生に対する2011年の調査の結果では、指導者という立場として教材「浦島太郎」を読んだ場合、64%が国定教科書版を選択すると回答した。御伽草子版を選択すると回答した学生は25%に留まり、比較読みなどのために両方選択したいと回答した学生は11%という結果になった。

先ほど示した一読者として、または、再読としての「浦島太郎」の読みの反応では、多くの学生が御伽草子版の方が納得できると回答していたのに対し、教材として授業をするとする立場での読みの場合、国定教科書版の方を選択する学生の方が多いという傾向がみられた。これはどういうことか。

その理由について、学生は指導者の立場としての教材選択の理由を次のように述べている。

##### 〔御伽草子版を選択したい〕

- ・国定教科書版より御伽草子版がはるかに面白いと思います。考えさせられるところもあるし、内容がシュールで良いと思いました。
- ・理解しやすいと思うし、最後の場面の乙姫の心遣い等は味わうべき。
- ・物語自体、おじいさんになって終わるより鶴になった方がどこか幻想的で美しいし、ファンタジー性があるからです。
- ・やはり国定教科書版は、子どもたちが読むにはショッキングというか衝撃が強すぎる気がします。

##### 〔国定教科書版を選択したい〕

- ・やっぱり昔に教材として扱われていた理由や良さがあると思うので。
- ・私が昔から祖母や母親から聞いていたのは国定教科書版であったので、なじみがあるから。変わって欲しくない。
- ・鶴になる方がハッピーエンドだと思いますが、まわりの大人などが慣れ親しんでいるのは、国定教科書版であり、そちらの方が教える側としてもしやすいのではないかと思います。
- ・昔から一般に伝わっている話がいじめられている亀を助けるという方だから。最後に鶴になってしまうという話は予備知識として持っているのだったらいいと思う。
- ・スタンダードなものだから。最近の子は昔話を知らないから。初めにハッピーエンド示した後、おじいさんエンドに移ると、そもそも聞く耳を持たないかもしれない。
- ・結末がハッピーエンドである必要はないし、私はうらしまらうがおじいちゃんになるという結末に関して様々な人と意見交流ができるのも楽しいと思います。体験活動の少ない現代っ子にとって想像しやすいものである方が良いと思いますが、その視点はどちらでもよいのかな。
- ・違う視点から見る重要性を学ぶには、まず前提が必要だと思うから。先に一般的でない方を教えてしまうと、得られるものは少ないと思う。
- ・たしかに、「どうしていいことをしたのに悲しい結末になるの?」と思いますが、必ずしも報われるわけではない、理不尽さや無情感のようなものを国語でしみじみ味わったことがあるので、必ずしも良いことをしたら全て良い結果になるという内容でなくてもいいのかなあと感じました。
- ・浦島太郎の裏話、これを幼少期のうちに言うことは避けたほうがいいかなと思いました。小さいときに反対ばかり聞いてしまうと、軸がぶれてしまうので、まず、小さいうちは基本となる物語を素直に読む、大きくなったらいろんな背景があることを知る、というように、学年・発達段階に応じて内容話を話していったらいいかなあと感じました。

〔両方選択したい（比較読み・発達段階を踏まえて）〕

- ・まずは、長年伝えられてきていて、多くの人が知っている方をしたほうが、一般常識としても必要となることだと思うので良いのではないかと思います。しかし、ほとんどの子どもが国定教科書の方を知っているのであれば、御伽草子版の方が面白いのではないかと思います。
- ・様々な話がごちゃ混ぜになっていて、矛盾が起きたり、いいことをしたうらしまがおじいさんになってしまう、という少しショッキングな内容ではあるが、「代々伝えられてきた昔話」として古典で扱うならば、よく知られた話の方を教えてから、「こんな話もあるらしい」と混乱をさせない程度で御伽草子版教えることにするのが良いと思う。
- ・低学年には国定教科書版、高学年には御伽草子版を指導したい。理由は、国定教科書版は絵本のような感覚で読め、話もすぐわかりやすく複雑な描写もないので伝統的な日本文化の指導の第一歩として良いと思われる。御伽草子版はより古典的な描写が含まれるため中高の古典学習への接続としてこちらを指導したい。

御伽草子版を選択した学生の理由は、読み物として、物語としておもしろいという、ほぼ前述した理由と同じものであった。それに対し国定教科書版の方は、「なじみがあるから」「一般常識として」など、学習者の読みやすさやなじみやすさを重視されている回答であることが分かる。さらに比較読みや発達段階を考慮し、両方読ませたいと回答している学生でも、国定教科書版を指導したあとで発展として御伽草子版を示すと回答しており、御伽草子版の方を先に読むと回答した学生はいなかった。

つまり、教材として御伽草子版を選択すると回答した学生も一定数確認できるものの、結果的に学生は、〈御伽草子版の方が合点はいくが、教育的には国定教科書版〉という結論に至ったのだということがいえる。学生は、「伝統的な言語文化」に関する教材の作品分析の特質とその重要性を認識しながらも、指導者の立場として、「一般的」で多くの人がなじんだものを教材として選択しようとしているのである。この国語教育観の問題は、ハルオ・シラネ（1999）が「カノン形成<sup>22</sup>」として指摘しているが、学生の認識の中でも古典や教科書をあたかも真理としてすがってしまう感覚が、国定教科書版を選択しようとする一つのきっかけになってしまっているようにみられた。

## 5. 小学校における古典文学教材の読みの現代的価値

### 5の1 「伝統的な言語文化」の登場による古典文学教材の読みの目的

2008（平成20）年において「伝統的な言語文化」が位置づけられて以降、小学校教育において、これまで以上に言語芸術や言語文化としての古典文学教材の価値が重要視されるようになっていた。

それによる特に大きな変化は、これまでの昔話や童話としての位置づけではなく、古典文学作品の歴史的・文化的意義を理解することや、古語・原文に直接触れ、体感することにあった。

このことにより、教科書に採録される教材自体にも大きく影響し、学習者は、これまでと同じ作品であってもその物語の内容が大きく異なる教材を学習することになっていた。このことは、小学校における古典教育として、今後何を読みの対象とするのかということに関わる大切な問題であった。

さらに、2020（令和2）年学習指導要領においては「知識及び技能」の（3）に「我が

国の言語事項に関する事項」というスレッドがたち、さらにこの項目が細分化されている。では、実際に他の古典文学教材や具体的な古典芸術鑑賞はどのように学習していけばいいのか。2020年学習指導要領完全実施に向けて、より緻密に検討していかななくてはならない。

## 5の2 小学校における古典文学教材の読みの意義

今回は教材「浦島太郎」の国定教科書版と御伽草子版の比較読みをし、そのとらえ方を描出した。

その調査で学生は、これまで定番であると思っていた「浦島太郎」と違うストーリーの御伽草子版と出会い、幼い頃に読んでいた自己体験とを比較し、純粹に「腑に落ちた」という反応をみせた。

また、矛盾や不自然さを抱えていた国定教科書版においても、ひとつの読み物として、物語としての読みを大切に捉え、自ら問題を補いながら読み進めようと試みていた。

このような学生の反応からは、学習指導要領において重視されていた歴史認識や日本文化の享受としての古典文学教材の読みというだけでなく、物語そのものと向き合い、柔軟な姿勢で物語を受容する環境の整備が必要であるということがいえる。

そのために、どちらの作品がいいのか悪いのかということではなく、今、何のためにこの教材を読むのか、という目的に応じた教材を選択することができることが指導者自身に求められるし、むしろ、自分たちの未知な本文と既知の本文とを比較対照して、児童がその物語についての新しい見方を手に入れることができるような方向での教材研究を進めていくことが重要である。学生たち自身が、あるいは授業する教師自身がその作品の未知の本文の方に「面白さ」を見出すとすれば、同じ発見を学習者に体験させる方向での授業づくりが必要である。

## 5の3 小学校における古典文学教材の読みの課題

今回の調査では、学習者の立場でとらえた場合と指導者の立場としてとらえた場合の読みに差異がみられたことが明らかになった。学習者の立場でとらえた場合は御伽草子版の浦島太郎を読んで純粹におもしろいと感じながら、指導者の立場としてとらえた場合、国定教科書版をスタンダードとして教材としたいという学生が多かった。

しかしながら、現在出版されている絵本の「浦島太郎」の多くは、御伽草子版を採用している。このように、指導者の国語教育観をそのままに、「伝統的な言語文化」の影響は、着実にみられる。現在この絵本を読んで成長している子どもたちの半数近くは、御伽草子版の「浦島太郎」を先に読んで就学することになるのである。

その影響からか、2019年の同様の調査では、当初の調査結果から変化がみられている。このことは、現役の指導者や小学生の立場としても、違う結果になるかもしれない（この分析と検討は別稿に譲る）。また、他の古典文学教材においても「スタンダード」が入れ替わりつつある現状において、どのように古典文学教材を捉え、読み進めていくか、今後

の課題となる。

- 1 教科書教材に採録された「うらしまたろう」は、1904（明治37）年『高等小学読本（巻2）』においてすでにみられるが、初等教育として採録されたものは、1910（明治43）年の『尋常小学（ハタタコ）読本（巻3）』からである。
- 2 『尋常小学読本』以降における教科書教材の採録状況については、その変遷に沿って中嶋真弓が詳しく示している。（2010）「小学校国語教科書教材『浦島太郎』採録の変遷」『愛知淑徳大学論集』文学部文学研究編第35号57-78頁
- 3 1910（明治43）年『尋常小学読本（巻3）』64-73頁
- 4 1918（大正7）年『尋常小学国語読本（巻3）』39-46頁
- 5 1943（昭和18）年『よみかた三』東京書籍97-113頁
- 6 1934（昭和9年）『小学国語読本（巻3）』107-121頁
- 7 1952（昭和27）年『こくごのほん（1年生後期）』二葉58-61頁
- 8 1953（昭和28）年『小学国語（2年上）』大阪書籍88-99頁
- 9 三浦佑之は、「明治四十三年以降四十年間にわたって、「浦島太郎」は国定教科書の題材となり、全国の子供たちに読み継がれた。しかも、読み物から戯曲へといった体裁の変化はありながら、その内容は全く変わら」と述べている。（1989）『浦島太郎の文学史』五柳書院27-28頁
- 10 三浦佑之（1989）27-28頁
- 11 教科書採録前後の作品については、松原一義が詳しく分析している。（2002）「浦島太郎の物語と教科書」『鳴門教育大学研究紀要』自然科学編第17巻1-10頁
- 12 松原一義（2002）3, 5頁
- 13 松原一義（2002）10頁
- 14 三浦佑之（1989）29頁
- 15 三浦佑之（1989）50, 208頁
- 16 渡辺春美【編著】『「伝統的な言語文化」の言語活動アイデアBOOK』明治図書3頁
- 17 「浦島太郎」（2011）『小学生の国語4年』三省堂104-105頁
- 18 小学生の国語編集委員会（2011）『小学生の国語4年学習指導書③』三省堂128頁
- 19 大島建彦【校注・訳】（1974）『日本古典文学全集36 御伽草子』小学館
- 20 三浦佑之（1989）185頁
- 21 あらかわしずえ（1998）「はじめてのめいさくしかけえほん 9 うらしまたろう」学研教育出版
- 22 ハルオ・シラネ（1999）「総説創造された古典」[ハルオ・シラネ、鈴木登美【編】『創造された古典ーカノン形成・国民国家・日本文学』新曜社] 33頁